日常と非日常の間で

根来 澪子

私は今年（２０２０年）１月２５日、風邪をひいていた。正確にはその前日、２４日から風邪の症状、くしゃみ、鼻水、鼻づまり、咳などの症状があり、あ、やっぱり今年も風邪をひいてしまったという思いはあった。２５日は、私が所属しているサークルのささやかな新年会があったのでよく覚えている。駅の近くのフレンチレストランに、６人の会員が集まった。私はとても食いしん坊で年齢にしては信じられないくらいの大食漢である。ましてその日は待望のフレンチレストランで何日も前から楽しみにしていた。ランチだったので朝食もほどほどに出かけて行ったのだが、何たることか食欲がない。オードブルは何とか残さなかったが、肝心のメインデッシュの肉料理が食べられないのである。味がしない。やっと一切れ、そのあとのデザートもただ甘いだけで全くおいしくない。異常事態の身体の状況であった。おまけにぐったりというか、いわゆる倦怠感が激しく、腰かけているのもつらいほどで、よろよろと帰宅してベッドに直行、夕食も食べる気がせず、そのまま朝まで寝込んでしまった。まさに典型的な風邪の兆候で、今年も不本意ながらひいてしまった。ほとんど毎年と言ってもいいくらい風邪をひくわが身の不用心さを反省した。着ぶくれて、エアコンやらファンヒーターやらを駆使して防備につとめ、大いに気を付けているつもりなのであるが、今年もやっぱりひいてしまった。

大した熱もないし（３７度弱）、のども荒れていない。しかし私の風邪は、安静にして市販の風邪薬を飲んで収まるようなものではなく、医院にいって抗生物質を処方してもらって服用しないと治らないのだ。翌日かかりつけ医で診断を受け風邪薬と抗生物質を処方してもらって3日ほど安静にしていたら、次第に快方に向かっていったのも例年通りである。風邪をひいたことに何の危惧もなく　一週間ぐらいで元気を取り戻し、平常の生活に戻った。

１月末頃にはまだ、新型コロナウイルスの話題はそれほど密ではなかった。私が風邪をひいたその段階ではもちろん、全く念頭になかった。しかしそのころすでに１２月に発生した新型コロナウイルス

は日本を脅かしつつあったのである。
新型コロナウイルスは、中国武漢の市場で売られていた蝙蝠がそもそもの感染源だと言われている。日本に最初の感染者がでたのは1月15日、中国武漢に渡航した人が感染源だと言われているが、2月3日、横浜港に到着したクルーズ船、ダイアモンドプリンセス号に乗っていた乗客の一人で、香港で下車した男性が感染して周りに広がったことが発端になったと言われている。乗客乗員３７００人を乗せたまま、２週間のあいだ、横浜港に留め置かれてその中でクラスターが発生したのが出発点であった。それでも最初はすぐに収まるという甘い認識があり、メディアもあまり取り上げることはなかった。2月中は私も普通に生活していた。公民館でのサークル活動も平常通りであったし、近郊の街へ出かけて食事をしたり、買い物をしたり、友人と会ったりした。　しかし、その後、急速に方々で感染者が続出し、3月に入ると公民館や図書館など、公共施設を使用してのサークル活動は一応4月半ばまですべてキャンセルするという通知があった。それは近郊の市も同じであった。私は毎週サークル活動で外出していたので大変に戸惑った。

しかし、まだ緊迫感がなかった3月中旬、友人たちと予定していた東京での梅見会と食事会は中止したものの、私自身はそれほど重大に考えていなかった。3月２０日には東京在住の娘や孫たちと都心での食事の予約が入っていた。高齢者が感染すると重症化するといわれていて不安があったが、会社員と大学生の二人の孫に会うのは久しぶりである。皆それぞれ忙しい中で時間を繰り合わせての会合だったので、せっかくのチャンスをスルーするわけにいかない。おまけに安くておいしいその寿司店は予約を取るのがむずかしいほどの人気店である。外出を自粛しているこの時期、寿司屋も空いているのではとの虫のいい期待もあって出かけることにした。
しっかりとマスクをして一時間、電車に乗って目的の店に行ったのだが、なんと店周辺は大変な人出である。老若男女、１０人ほどが開店前の店にたむろしていたのにまず驚いた。
予約の時間になり店内に入るとこれまた満席である。隣との席も近い。孫たちも娘も全く新型コロナウイルスに対しての心配どころか、話題にもしなかった。私はなにやら不安だったがせっかくの孫たちとの出会いを期待通りにしないともったいない

と思い、大いに楽しむことにした。一人暮らしで若い人に会うことのほとんどない私にとって彼らとの会話は本当にうれしかった。2時間はあっという間にすぎ、寿司屋の外に出て気づいたのだが、隣は今時珍しいこじんまりとしたクラシックな純喫茶である。看板に本格的なコーヒーのメニューが並んでいる。コーヒー好きの私にとってこれは是非入ってコーヒーを味わうべきである。

その喫茶店は各国のコーヒーの種類にこだわっていて客への応対もよかったが、喫煙者がいてもOKなのだった。せまい室内は「3密」そのものでいかにも空気がよどんでいる。全く気にしない孫たちを急かせて戸外に出てホッと一息ついた。ゆうに3時間、「3密」の中にいたことになる。帰りの電車で大丈夫かなーといささか不安だったが久しぶりに会った孫たちの成長ぶりを見たのだから、くよくよしないことにした。

娘は虎ノ門にあるビルの会社に勤める会社員である。新型コロナウイルスのこともあって有給をとり、3月半ばから2週間ほどの自由な時間を持っていた。セブ島に行くはずだったのがキャンセルを余儀なくされ、せめて箱根の温泉に一泊したいと私を誘ってきた。3月25、26日のことである。昨年暮れに長女を亡くし、娘にとっても大好きな姉を亡くし、二人で涙にくれる日々だったので、この辺で気分を落ち着かせようと私も誘いに乗った。箱根なら東京と反対の方向だし、観光地はガラガラに空いているというテレビの情報を得ていたので大丈夫だろうと思ったのだ。そのころはすでに連日二桁単位の感染者がでていたので自粛すべきではないか、という思いがよぎったが、ホテルも空いているだろうし、何よりも箱根は木立に囲まれ、空気が爽やかでウイルスも遠慮するだろう。一泊とはいえ、久し振りの旅行で、おまけに初めてのホテルだったのでウキウキした気分で娘とでかけた。2日間とも好天にめぐまれ、絶好の旅行日和であった。

ホテルは山の中腹のひっそりとした木立の中にあった。周囲はいかにも静寂という感じだが、驚いたことに、若者であふれていたのである。情報では閑古鳥が鳴いている筈の観光地のホテルは活気に満ちて、ロビーは若い男女の熱気で一杯だった。2部制での食事会場もほとんど満席と言ってもいいほど。私のような高齢者は2、3組ぐらいであった

だろうか。娘も目を丸くしていた。後で納得したのだが、3月末は学生の春休みで、海外の旅行もままならず、国内でも長距離の移動は、はばかられるので近場の箱根に繰り出したのだろうということだ。箱根にきて「密」に出会うとはまったく想像しなかった。ホテルは中程度のレベルであろうが、部屋には焙煎したコーヒー豆と、手動のコーヒーミル、ドリップがセットしてあったのには感動した。インスタントコーヒーにあらず。珍しいことである。窓からの風景も全くの森林で、喧噪とは程遠く、ゆっくりとくつろぐことができた。

翌日は娘が一度も行っていないという「ガラスの森美術館」を案内した。これまた美術館も人で一杯。晴天に恵まれ、日光に反射して輝くガラスの木々は幻想的で美しかった。あまりにも人工的だと友人は言うが、ベネチュアを模したこの美術館を私はお気に入りで何度か尋ねている。バスも満席、いたるところ人人であふれている箱根は、全く想像外の混雑であった。それなりの満足をもって帰宅したが、その夜から、東京での新型コロナウイルスの感染者が激増し、都知事や閣僚たちがテレビで外出の自粛をよびかけるようになった。

ガラスの森美術館

そうして私はその夜から不安に脅かされるようになった。若者に交じって「3密」の中を泳ぎ回ってきた。大丈夫、感染しないと言い切ることはできない。いや、感染しても不思議ではない。電車の中、バスの中、ホテルでの食事、温泉風呂での接触、ガラスの森での人の列、どれも不安材料である。無症状でも感染している人たちが、殊に若い人に多いと

聞く。3月25日を境にして感染状況はますます厳しいものになり、娘も心配になったらしく「大丈夫？誘って悪かったと思っている」と毎日電話をかけてくる。

新型コロナウイルスの潜伏期間は2週間であると聞く。26日から2週間、私は朝に、夕に、コロナ感染の恐怖に晒されることになった。ホテルでの豪華な和食の夕食も朝の、豆をひいてのコーヒータイムの安らぎも、いまや私の不安を慰めることはできなかった。朝起きてオロオロしながら熱を測る。ヤレヤレとその時は安心する。ソファに寝そべり、ボーっとして、ひたすらテレビをみて時間の経つのを待つ。テレビはあらゆるチャンネルが一日中新型コロナウイルスの話題で持ちきりである。息苦しさ、短期間での悪化、ことに高齢者は重症化する率がたかいという。ちょっと咳が出てもどきっとして、黙々とわいてくる不安におびえる。夜になり、やっと今日も感染を免れたとホッとする。これといった異常はないのに、今にも症状が現れてくるのではと、ぐったりと病人気分になってソファに寝てばかりいる。

なんとそんな無為な日々にひたすら耐えて、2週間も過ごしたのである。防護服を着た看護師や医者に囲まれて隔離病棟に入る自分の姿を夢に見たこともあった。私が感染したらその感染源を探るためにいろいろと尋問されるだろう。周りにかける迷惑は計り知れない。感染してから5、6日目が発症の平均値だというので、その日々はなおのこと緊張をした。何も手につかなかった。大丈夫だよとわが身を鼓舞し、一千三百万の都民のなかの二桁単位の感染率ではないかと慰めてみてもダメであった。朝が来て、夜が来て、そしてまた朝が、と大げさではなく私はびくびくしながら2週間を過ごしたのである。4月某日の読売新聞の川柳欄に次の句が乗っていたがまさにその状態だった。「寝て起きて、食べて歩いてそして寝る」

箱根に行ってから10日目が過ぎたことからすこしずつ安心感が湧いてきた。そして2週間が過ぎた4月8日、万歳を叫んだ。私は新型コロナウイルスに感染しなかったのだ。「3密」の中をかいくぐり、無事切り抜けた。まるで新型コロナの重篤な状況から生還したような気分であった。

それで私が痛感したことは、私は「気の小さい、善良な市民」であるということだ。そんなことなら

最初から出かけなければよかったのに旅行の楽しさの誘惑に勝てず、おめおめとでかけていって、結果、くよくよと心配する。その心底は外出自粛という政府の方針に反したといううしろめたさである。周りの人たちは自粛しているのに私は自分勝手なことをしたという反省、そんな反省で私は2週間もどんよりした日々を過ごした。

4月7日、安倍首相は「緊急事態宣言」を発出した。5月6日までというがこれも延長する可能性大である。実際首相は5月いっぱいに延長した。高齢者の唯一の楽しみ、友人に会っておしゃべりをし、一緒においしい食事をするというこれまでむしろ推奨されてきたことが自粛の対象になったのは皮肉である。いつ解除されるかわからない、先の見えない不安に耐えて一人暮らしの高齢者はひたすら孤独に耐えた。

しかし私は体制に従うまことに善良な小市民である。政府の要望には真っ先に耳を傾け、他人と外れたことを嫌う一市民である。まあそうは言っても、いまは戦時下ではないから天下の趨勢に従うのは当然のことだ。わが身を含めた人間の命を守るために、これからは後悔しないように自粛に努め、新型コロナの封じ込めに協力することにしよう。

東京在住の学生時代の友人が電話でフランス20世紀の作家、アルベールカミュの小説『ペスト』が今、盛んに読まれているということを知らせてきた。新型コロナウイルスに翻弄される現代の世相が、第二次世界大戦終了直後に書かれた『ペスト』を髣髴させるという事だ。まさに古典は年を経ても、いつでもよみがえる力を持っていると痛感する。カミュは昭和30年代の初めに学生時代を過ごした私にとって象徴的な作家である。当時、ジャンポールサルトルとアルベールカミュは「フランス文学科」に籍を置く学生にとって20世紀文学の双璧であった。1905生まれのサルトルは哲学者でもあり「実存主義」が華やかに論じられる世代で、小説、戯曲、評論などあらゆる分野で活躍した大作家であった。少し遅れて1913年生まれのカミュも「不条理」の哲学を打ち出し、『異邦人』の一場面、殺人を犯したムルソーが動機として「太陽がまぶしかったから」というセリフは有名で、あらすじは周知の名作である。1956年、43歳の若さでノーベル文学賞を受賞（ちなみにサルトルは受賞を辞退し

ている。サルトルは公的な賞をすべて辞退している)。

１９６０年、４６歳で自動車事故により死去。私にカミュを論じる能力はないが、『異邦人』とともに『ペスト』も当時、よく読まれた小説であり、私も翻訳ではあるが人並みに読んだ記憶がある。

その７０年以上前に書かれた『ペスト』が、世界を巻き込んだ「新型コロナウイルス」感染の恐怖で、自粛を与儀なくされ、気持ちまで萎縮し切っている２１世紀の昨今、脚光を浴びているのも昔のカミュの愛好者にとっては喜ばしいことである。まさに「時代が求めた本」であろう。私は数年前、魔が差したとしか言いようのない状態で長年収集した本を自宅まで来てもらって神田の小宮山書店に売り払った。その悔恨はいまだに消えないのだが、昭和４４年、宮崎嶺雄の訳で出版された『ペスト』は、あまりにも薄汚れていて、売りものにならないと判断した書店員が書棚に残していった。それを何十年ぶりかで読み返す機会を得た。まず、当時の書籍は文字が小さくて紙質も悪く、読みにくいことこの上なく、しかもかなりの長編である。読み進むべく努力をしたが、ついに放棄してしまい、最新版を求めて書店に出向いた。さすが売れているという評判だけあって平積みされている。令和２年４月の８９刷の最新版は、活字が大きくて大変に読みやすい。何ら抵抗なくページをめくることができたが、訳者は昭和初期の仏文学者宮崎嶺雄で翻訳文が硬く、内容が記録風なのだから、せめてもっと滑らかな文章で、と思わずにはいられなかったが、原文もおそらく常道的な文体とは違うのではと思っている。なにしろノーベル賞受賞の作品であるのだから。しかし、長々と描写されるオラン市の風景を何とか読み進むにつれ、書出しから、たしかに現代の「コロナ発症」の状況と似ていることに気付く。一読して、作者自身ペストを経験したわけでもないだろうが、その病状、巻き込まれる人々の行動や意識を細かく描写していることにまず驚く。

物語の発端は、アルジェリアのオランという架空の都市でネズミの死骸が大量に発生し、その後にリンパ腺腫脹と嘔吐をともなう病が一気に市民を襲い、死者が続出する。それが「ペスト」という伝染病であると断定することを躊躇する市の役人は当初、「もしそれが自然に終息しないとしたら、法律によって規定された重大な予防措置を適応しなけ

ればならない」という懸念を持っていたからであった。小説の主人公、医師のリウはペストであると断定するかどうかの問題ではなく、市民の半数が死滅するという危険を持つ病であると断言して、患者をすぐに隔離することを提案し、知事に憂慮すべき事態を報告。知事は総督に連絡し、総督からの電文によって都市は封鎖される。現在の政府の思惑と対応の遅れも、我々が新型コロナウイルス感染の最中にあって経験していることと同じだ。このあたりから作品世界に引き込まれていく。

この頃からペストはオラン市民の日常のすべてを支配する。市門の閉鎖は、たまたま用事があってオラン市にやってきて、数日、あるいは数週間のちに市外に出ようとしている人までも足止めにし、また、市外に住む人たちと全く別離の状態に置くことになってしまうことでもあった。医療従事者の激務。経済のストップ。行動が制限される市民の不自由さ。密閉されたオラン市にあって、役人やいろいろな市民の、様々な人間模様が描かれ、それぞれの事情で問題が複雑になっていく。リウは友人、タルーの提言で保健隊を組織して、新聞記者のランベールや下級役人のグランたちとペストに立ち向っていく。

キリスト教の国らしく、イエズス会の神父パヌルーが登場する。彼は信者に対して「ペストはオラン市の持つ罪にたいする神からの罰である。悔いあらためよ」と説教をする。小説では説教の内容が延々と語られる。しかし、優秀な医師、カステルの作ったペスト菌の血清が子供に試されると、効果はなく子供はむしろ苦しみが長引いて壮絶な死に方をする。その描写は微に入り、少年の苦痛は凄惨である。（旅行者でもあり、物語の記録者でもあるタルーがペストによって死を迎える場面も同様で、ペストに罹患することがいかに恐怖を伴うものであるか、タルーの苦しみがじっとりと伝わってくる）。子供の死の床に同席していたパヌルー神父は動揺する。幼い子供を罰する神とはいかなるものか。子どもに何の罪があるのか。「冒涜とか祈祷とかを超えて我々を結びつけるもののために、我々は働いているのです」とリウは言う。パヌルー神父は宗教家として、信仰を捨てるか、自分に降りかかるすべてを受け入れるか決めなければならない、と説き、改めてオラン市民に説教を行い、神に対する自分の意味づけを述べるが、この部分はヨーロッパにおける神と信仰の問題を論じていて難解であり、私の理解を超えて

いて私は要約できない。やがて神父も保健隊にはいり、市民と連帯する。しかし彼もペストに侵され、医師の診察を拒み、治療を拒否し、十字架を握りながら息を引き取るのである。リウは次のように言っている。「もし自分が全能の神というものを信じていたら、人々を治療することはやめて、そんな心配は神に任せてしまうだろう」と。神父パヌルーもそのような種類の神は信じていないのである。

多数の死者のために棺も足りなくなり屍衣も、土地も不足したので、遺体はひとまとめにされ埋葬されるようになった。（今回、新型コロナウイルス惨禍のトップクラスであったイタリアのテレビ映像で、何十台ものトラックに積まれた棺が火葬待ちで歩道に延々と並んでいた映像をテレビで見たとき、ショックを受けた、この点でも事態はまことによく似ている）

９月になり、１０月に入ってもペストはオラン市民をその足元にひれ伏させていた。数十万の人間が、いつ果てるとも見えない週また週の間を足踏みしていた。発生当時にはペストの蔓延の持続時間をいつまでも続くことはあるまいと信じていたのだが、日がたつにつれ、憂慮は深まり、経済は疲弊し、もはや病疫の終息することが、市民の最大の希望の対象となったのである。まさに暗黒の日々を過ごしていた。

４月に発現し、６月に都市封鎖されて市民に恐怖を与えたペストは夏から秋、冬へとオラン市に大混乱をもたらしたが、１２月にやっと終息の兆しがみえてきた。９か月間、吹き荒れたペスト旋風はその後、突然、潮が引いたように去っていったのである。２月のある晴れた日の朝、市の門は開いた。都市封鎖の解除は、新聞に、ラジオに、県庁の公示版に提示されて門の扉はついに開いたのである。次のような描写がある。

「終結をただ祝う者たちは、それまでの犠牲をすべて忘れて、死んでいった男女を思い返すこともない。しかし、それが皮肉なことに人間の強みであり、罪のなさであり、人間性なのだ」。人間に対するカミュのすごい洞察だと思う。人々は喜悦の叫びをあげて祝う。作品は最後に次の文章で終るのである。

「―ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、数十年の間、家具や下着類の中に眠りつつ生存ことができ、部屋や穴倉やトランクやハンカチや反古のなかに辛抱強く待ち続けていて、

おそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために再びそのネズミどもを呼び覚まし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせるために差し向ける日が来るであろうということを」。

この小説は皆が団結してペストに勝ったというサクセスストーリーではないことをリウははっきりと述べている。封鎖された都市の内部でどのようなことが起こったかを辛抱強く書いた記録風の小説である。時代を経ても現代のコロナ旋風に翻弄される我々の行動と心理とあまり変わらないのだと痛感する。

２１世紀の現代、医学は進歩し、当時のような惨禍はないが、それでも世界規模では五十万人の死者がでている。日本では政府の呼びかけに従った一人一人の行動の自覚によって罹患数は減っていき、６月に入った今、自粛は解除され、一息ついているところだが、第二波の流行がすでに予測されている。握手したり、ハグしたり、ハイタッチしたりと、平常の生活様式に戻れるのはいつ頃のことだろうか。しかし非日常だと思っていた自粛生活が、日常と入れ代わって、もはや我々には以前のような肉体をもって喜びを表現する対人関係は当分望めそうもない。団欒風景も消え、それどころが人と会うときには２メートルはなれて、とか、アクリル板で距離を遮断して話す、などということが当たり前のような生活様式になったら私たちの人間関係も、精神もどのように変化していくか想像がつかない。映画館や美術館の鑑賞、文化会館の芸術的行事への参加など、新型コロナウイルスが終息したとはいえ、トラウマに悩まされ、用心深さは解消されることなく、簡単に以前のような気らくな心理状態に戻ることは難しい。学校にいけない子供はストレスがたまり、高齢者は外出自粛の呼びかけで家に閉じこもり、肉体能力が驚くほど低下したと新聞に出ていた。私もそれを実感している。新型コロナウイルスは経済のみならず、私達の日常をむしばんでいるのである。

ヨーロッパでは各都市の市街地にペストの記念碑を見ることがめずらしくない。ペストの終焉を祝って建てられたらしいが、１５、６世紀のヨーロッパにあっては、人口の三分の一が死亡したとされる。ペストの猛威は、ブリューゲルの絵画、「死の勝利」にも描かれている。カミュの『ペスト』の小説の中でも記念碑を建立する場面が出てくるが、ヨーロッパではこのような建造物が多く、災害を忘れるなと

いう配慮であろう。

ヨーロッパの街角

近年ではスペイン風邪の流行で多くの死者が出て日本も被害を被ったというが、カミュの言うように、人間は忘れるのが得意で、それがまた長所でもある。令和元年を私達は新しい希望をもって新天皇を寿いだ。年が明けて令和2年に、まさかこのような地球規模の災害が訪れることを想像さえしなかった。昨日、そして今日のように、明日も平和な日々が繰り返されるだろうと信じて疑わなかった。「災害は忘れたことにやってくる」とは寺田寅彦の言葉だったと思うが、台風やら地震やらに目を奪われていると、突如としてこのような病災に見舞われるのだ。

ところで私が1月末に引いた風邪は、季節による風邪だと信じているが、自粛という非日常の生活の中にあって、気分の落ち込んでいる昨今、まさか、あれは新型コロナウイルスではなかったかと、ふと思って、慌てて打ち消している。やがて冬が巡ってきて私は例年のように風邪をひくかもしれない。それが単なる風邪か新型コロナウイルスか、その判別に戦々恐々として、くしゃみや咳をしても恐れ、熱があるのではと恐れ、平静ではいられなくなるだろう。毎日を生きるのに必死な生活が待っている。私の人生の晩年で、降ってわいたような不条理に遭遇している。

（２０２０年　６月）